お十夜の歴史と其所感

井川定慶

十月六日、午後七時十五分より三十分間、名古屋中央放送局の宗教講座放送の「お十夜の歴史と其意義」の稿本である。

本月はどこのおてらでもお十夜がつとめられ又俳句の季題にもありますので、こゝにその「お十夜の歴史と其意義」について定められた時間内にお話しをいたそうと考へてゐます。

「お十夜の赤蠟燭や眞如堂」（紫八）といつたやうに、京都東山の眞如堂がそのおこりでありまして今から約五百年まへ永享年中に初められたのであります。即ち

後花園天皇

の御宇、足利義教の執權伊勢守平貞經が子に、兵庫頭貞國（法名眞蓮）と云ふ者がありました。

この貞國は寛政重修諸家譜によりますに、初め七郎貞慶と申し、後に備中守から伊勢守になつた人で、從五位下（侍從）に叙せられ、普廣院義教、慶雲院義勝、及び慈照院義政につかへ、政所職となり、享德三年五月二十七日、年五十七歳で卒して居ります。宮本系圖によりますと、貞國は實は貞經の弟とありまして、貞經の養子となつてゐたやうでほんとうの父子で無かつた爲めか、容易に家督を讓らなかつたのです。

そこで、貞國は世を儚んで、京都東山の眞如堂に三日三夜參籠しまして、念佛を勤め、滿夜の曉に剃髮せんと思ひ定めまして、假睡するうち、五更（午前四時頃）に向はんとして夢に高僧現はれ告げて云く、「汝、現當二世に於て、我を賴み志に僞なくば來世は超世の悲願に救はるべし、今世の事は尙ほ三日を待つべし」とて、一首の詠歌を以て其意を示し遁世の思ひを翻さしむ。ところが翌日果して父貞經は台命により隱居し、貞國は瑞夢の如く、三日を經て家督を相續し、非常に繁昌したのであります。そこで日夜本尊に參詣して念佛怠なく、法名を眞蓮と號しました。又父なる貞經は、吉野を拜領し、勢元と號し、これ亦佛門に歸入し、一門も圓滿に向つたのであります。

此不思議な靈告を父貞經に物語つたが、將軍義教公の聞くところとなり、いかにも隨喜渴仰の餘り、更に台命を下して比叡山の衆僧を請じ、七日七夜の間引聲念佛を嚴修されたの

で、前の三日三夜を合して十日十夜となり、その滿願日が丁度十月十五日恰も阿彌陀如來本願成就利益衆生の御日に當り恰かも鼓音聲經、大阿彌陀經や無量壽經に勸められた十日十夜の別行に符合したので、十日十夜法會と稱して恒例となし略してお十夜といふ事になつたのであります。この

お十夜法要　の淵源をなした伊勢守貞國といふ人は、一度は世を儚みましたけれども、親孝行で信仰の厚かつた人と見えます。先年越前敦賀市外松原村原西福寺にまゐつた節永享十三年二月九日付の寄進狀を見出しました。それには

釋迦尊像普賢文殊　座像鑄佛
并　像爲西福寺　師子像
經堂本尊所奉寄
先考聖靈并現在悲母
可預往生極樂之懇
祈者也仍寄附之狀如件
永享十三年二月九日　伊勢守貞國（花押）
西福寺侍者御中

とあり越前迄も父母往生極樂の爲めに寄進されて居るのであります。

さてお十夜法要の勤行の儀式は引聲念佛でありまして、その昔宇多天皇の聖代に慈覺大師が入唐せられてかの國の五臺山淸涼寺法道和尙といふについて、引聲念佛の作法を習つてこの法要を傳へられ、寛平六年に我が日本叡山の常行堂に於て修せられたが甚だ殊勝であるから、それから叡山の引聲念佛といつて恒式になつてゐた作法であります。そしてこのお十夜の事は將軍のみならず、九重の雲深くまで達し上意彌々淺からず、末代の爲めに十夜の寄進として、堂塔の供養をせしめられるし、一般庶民は群參して、寺門繁榮なるといふ有樣となつたのであります。

而して、眞如堂は鈴聲山眞正極樂寺と申し、應仁の亂後、叡山西塔黑谷に移り、文明二年近江の穴太に遷り、九年京都一條に轉じ、同十六年義政の尊崇に依り故地に復へさせられ再び、念佛信仰道場の中心となつたのであります。

山科言繼卿記の永祿十年三月十日の條に

於眞如堂、爲光源院職御訪、京ノ邊土、攝州池田ノ衆坂本衆ガ、六齊念佛、大施餓鬼有レ之、十六七ケ所之衆、先キニ別々ニ念佛申ス之、次ギニ各ノ一度ニ又念佛有之、鉦鼓之衆二千八百人、

貴賤男女之群集七八萬人、可キ有ルカ之歟之由、各ノ申之、四方ノ土居、無其所。先代未聞之群集也、見聞了シヌ。

といふやうな盛んなものであつたのです。

ところで、この伊勢貞國が眞如堂で初められたお十夜法要が、現今

淨土宗にて

專ら此法要を修するに至つたのにも理山があります。それは後土御門天皇は、偏に念佛門に入り給ひ明應四年乙卯三月天下に令して、淨土教の達者を召し出さる。時に鎌倉光明寺の長蓮社觀譽上人其選に入り宮中に入りて三七日の間、お經を講ぜられました。時に眞如堂の衆徒を集め、觀譽之が導師として引聲の彌陀經、引聲の念佛を行ひました。更に之を我が精舍に移して、永く淨土の勤行に備へんことを望みて、勅許を受く。是より光明寺にて、毎歳十月之を修し、遂に廣く淨土一門に於ける儀式となれるなりといふ。

その事につきましては明應五年丙辰十月十五日光明寺第九世源譽の書ける十日十夜略緣起一卷ありて上記の由來を述べて居ります。

かやうな歴史があつて、十月六日より同十五日まで京都の眞如堂、鎌倉の光明寺を始め淨土宗の一般寺院において十日十夜の法要を修することゝなつたのであります。

釋尊がお經に說いてゐるお十夜の曲據となるのは無量壽經卷下に「於此修善十日十夜、勝於他方諸佛國土爲善千歲」といふに基くので其の意味は、かうであります。

この世界で十日十夜善事をのみ致せば彼の淨土で千年の間善事を勵んだよりも勝れてゐる、それは佛の淨土には毛髮の惡もない又惡を働く者もない、自然に善根功德の積めるやうに出來てゐる。所がこの世界では到る處に惡のみ多く行はれて善事はなか〳〵出來難い、出來難い處で努め勵んで行ふのだから、十日十夜も眞劍に行つた功德は彼の土でする千年の修行に勝るのである。

といはれて居ります。實際自己反省をなし、靜に世相を鑑へてみたい。

吾々は罪の

塊であります。不完全な者であることを私は信じて居ります。實際、他人に向つては、つくろひもして濟ませませう。事實の黑白を反對に辯じおほせもし、糊塗して通る事がありましても、自分の心を自分に誑すことは出來るものではありませぬ。日中の間は物事に紛らして居られても、眞夜闇然たる只中に、自ら胸に手を當てゝ、靜かに回顧する時に、吾乍ら吾乍らと淺猿しいに、自らあきれもし恐ろしくもあるのです。

心こそ鏡に映るものならば、
嘸や姿の見にくかるらん。

とは古人がこの邊の消息を告白せられたものでせう。而して以前には些して惡いことは思つてゐなかつた事も、進むにつれて、後悔する事もあります。昔の道德論者は、無智者が善人と申しましたが、一概にそうは申されませぬ、それでは人格を磨き智能啓發する必要がないのです。近頃の倫理學者の見るところでは、人格を立體的に見、一般的智識を入れて居り

ます。見知りになるほど、物事の經驗を積むほど、物事の善惡の辨別がついて來るのが當然で、學問も、努力もここに必要なのです。然し、立派なる智識階級者間に巧妙なる詐僞行爲や、重大犯があるために、學問は不必要とは申されぬのでそれは無知者は生眞面目だとて、白痴者中には温順も居るが度し難い常習犯もあると同理なのです。

然し知識は人格を向上せしめる助けであるが、人格向上そのものではないのです。研究の立場からは學問の爲めの學問であらねばならぬと論ずるとも、人間對立の世間に生存する一員たる以上は他人に迷惑を掛けず出來うるならば、この同居の社會の向上のたとひ一歩でも進めることを計る樣につとめて行つて然るべきです。

それではどうすれば、人間は完全に近づいてまゐるのでせう。昔の計算によつて意念を數へたのであるが、一人一日中に八億四千の念あり、念々の中の所作は皆これ貪慾、瞋恚、愚癡の三所作と極言されても反對しがたいほどの吾々なんです。たとひ善事をしても、結果を望み、報いを前勘定し易いのが、常習でせう、この心をどうして、育むでまゐりませうまじめに考へさせられたときには誰もが、こゝに思ひ着いて來るものです。

世間では　衣食足つて禮節を知ると申しますが衣食住を完全にしたらよいでせうか。立派な着物を着ても腹が立てば、紳士、令婦人風の萬引さへあつて見れば、衣物を立派にして見たつて少々行儀はよくなるとも決して人格は向上しさうにもない。

美味しい物をたべ乍ら、美酒を嘗め乍らも、つぶやく姿を見せつけられると、食物だつて駄目である。

立派な邸宅に住まひ、或は現代流行の文化家に住み乍らも家庭の風波を法廷に持ち出し、新聞種を提供したり詐僞取財の巣窟であつたりする事があつて見れば、住所必ずしも人格を向上せしめないものでありませう。

金然らず、知識又然らず、親類緣者のある事も罪の豫防の一助けとはなつても絶對的に人格向上に益立つものではないやうである。

再び、倫理學者的に立ちもどつて見るならば、罪を豫防し人格向上、社會奉仕といふ事も、他律的や、他動的では駄目なのであつて、自律自制、自動でなければならぬ、自覺せねばならないのであります。

知慧第一の法然房と讃へ給はられた法然房源空上人の求道の落着きは、學問でも、名譽でも權門勢家でも充たされなかつたのである。善導大師の觀經疏の罪惡自覺より來たる、阿彌陀佛へのお縋りであつたのです。何らの缺點を取り立てゝ申せない完全圓滿な法然上人が、十惡の法然、五逆の源空か

念佛して往生するなりといふ。一は自らの罪惡内省に恐れ泣き同時にこれが救濟さるゝ機根なるかなとの法悅の感泣となつたのです。かくして以前の心狀に引きかへて心豐かな安心狀態法悅の生活をつづけられ、雜念無ければ理性益々冴え、意思亦强固にして熟慮斷行死も亦厭はぬ底のものに磨き上げられたのである。

吾々も大きな事を申し、そらうそぶいて、うら恥しき思ひをするよりも、自ら眺め見て、どこかに不完全を見届けたるをしほに、額ら向上に思ひを運ばせ、岐路に迷はず、現代適應、將來益々必須の信仰に生きて行きたいものであります。かくの如く、この世界では

眞實の生活

は求めて止まぬにしても實行は六ヶ敷く自らなさうとしても他が妨害をなし、思ふやうな眞實善の生活は少く、反對に惡事ばかり多く行はれる。さりとて、美事が行ひ難くいからといつてタマゲてゐるべきでない。元氣百倍して精進すべく勵ませられた思召しである。其の惡多いところで善をするが故に、十日十夜の善根が淨土に於ける千歲にも勝れてゐることに相當するのであります。

この經說の精神は、この世界に於ての眞實の生活、善事を精勵するやうにと勸められたのである。然し念佛を說いてゐるお經なるが故に、淨土敎の信仰の立場にあつて、特に念佛は無上功德の大善であるから、善事中の善として修すべしと勸められてゐるのであります。有緣の宗敎に哺育されて信仰生活に入りませう。

大善功德のお念佛を唱へて功を積めば、古人の俳句にもあるやうに、「極樂はいつも月夜に十夜かな」といつたやうになつてくるのであります。所詮一日一夜なりとも惡を止め善に進みて積功衆德諸上善人となりたいものであります。

尙ほ眞國のお十夜の緣由からして十月にお十夜をつとめますけれども、お經の精神から申せば、十月六日から十五日といふやうな月日に限定はない。何月何日でもよいのである。且つ十は滿數を示すものですから、十日十夜は年が年中、終日終夜の意となるので、吾人は本月本日を出發點としてお十夜の精神に基き、多少たりとも、宗敎的生活へ進ませられてこのお十夜を意義あらしめて頂きたいのであります。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。